

若いお母さんたちへ

弱い母親

杉本 裕子

家のなかに大人は私一人。そして幼い子供達が遊んでいる。ふと目を窓の外にやると、どこからか得体の知れない地鳴りのような音が響いてくる気がする。一体なんだろうと不安になり、まわりついてくる子供に応えるのも気もそろに、窓の外ばかりが気になる。ときどき私は自分が今そんなふうになっているような気がする。家事と育児におわれて、日常の些細なことばかりにかかわらず、社会のことや世界の動きといったことが全然わかっていないのではないだろうか。だいたい新聞を読む時間さえなくて、政治・経済・国際情勢など、ちんぷんかんぷんなのだから。こんなことではいけないと不安に苛立ち焦りはじめると、もうことはどんどん悪くなっていく。

母親として私がしている仕事は、実際に身体を動かしたり目に見えるというところでは本当に小さなことばかりだ。おんぶして重い荷物をもった

り、だっこして駆けあがったりということはあるにしても、小さい子供を相手にしていることだから、私の動き方だつて子供が目をまわさないくらいのもなのだ。ただその小さいことがずっと連なっている。綿々と一日中。日曜・祭日なく。ところが一度何かの理由で苛々しはじめると、この繊細なことの連なりがあつという間に崩れていってしまう。子供に服を着替えさせる手つきも荒々しくなり、応える言葉や目つきも険しく凄味を持ち、子供は私におびえて泣き叫び、細い糸で編んでいたものがあれよあれよという間にほつれていくように、もうどうしようもない。そんなときががっかりして、もう一度やり直す気になるまでずいぶん時間がかかる。

こういうことを繰り返しながらやってきているうちに、長男は幼稚園の時代を終え、春から一年生になる。あんなにしょっちゅう私のいらだちの

波に襲われて、この人の幼児の時代はじゅうぶん幸せなものだったろうか。私はくびをうなだれて、子供に「ごめんね」と謝らずにはいられない。でも、何度となく悔やみながら、子供の心に傷を負わせてきたことに自分もまた傷みながら、何か、どこかで私は考え違いをしていたのではないだろうかと思いはじめている。母親ってこんなにしんどいことなのだろうか。自分に無理をして疲れ果て、また気をとりなおしてはまた転び、そうこうしているうちに子供はどんどん大きくなっていってしまう。何だか、私はこの子供の母親になったときから受け取れるはずだった喜びの大半を、指の間からこぼしてしまつたような気がする。

窓の外のこと気がなりだすと、正体不明のものに不安にさせられてしまう。今幼い子供を育てていると、テレビからラジオから、雑誌の記事か

らも、もちろん育児や教育関係の本からも、さらにはダイレクトメールでも、親としてしなければいけないこととその方法についてが、有無を言わず洪水のように浴びせかけられる。進級・進学の際にはそれがひときわ力を増すようで、これが社会の現実ですよ、いつまでも親子で家のなかでぬくぬくとはしてられませんよ、という声の多さにこちらはまったく呆然とする。

でも、実際にその現実社会のまんなかで仕事をし、心身ともに消耗して帰ってきた夫が、やっとたどりついた家で子供達の様子をみて安心することだ。「みんな元気いっぱいでいいね。大切なことだよ」と。すると私は、もしかしたら子供の生活にこそしっかり目を向けていって良いのではないかと思う。政治・経済の動向や社会の情勢は私達を巻き込み、どこかに連れ去る大きなうねりのように思える。でも毎日私の目の前で起きている子

供の育ちには、深く豊かな人間性の体験がこめられていくにちがいない。

母親としてであれ、保育者としてであれ、子供と共にある生き方を選びとるとしたらそれはなぜか。理想的な母親や保育者になるべく自分を研ぎ、そして理想的な社会人を我が手で育てあげたいと思うからだろうか。違う、それは本当はもっと暖かいこと、大地の中から作物の実りを収穫し味わって食するというような、自然の恵みを受け取るにも等しいことなのではないだろうか。

こどもって不思議だしおもしろい。ときどき、子供がしていることの内側までちらっと感じられることがあると、こどもってすごいんだなあと感嘆してしまう。私はこの驚きをこそ毎日連ねていきたいらいいのと思う。でも主婦として、日々の家族の生活をささえていく営みは実際煩雑で、また別の神経をも使っていくかねばならない。子供に

ゆっくり感心している余裕もなかなかないのだ。それにただのか弱い一人の人間にすぎない私は、簡単に得体の知れない不安や苛立ちに飲み込まれてしまう。子供と共にいることで豊かで深い人間の体験をするということが、いつでも誰にでもわかりやすいことなのであれば、母親であることにいつも前向きでいられるのに。しかしそれが自明なことでないのは、ただ子供と一緒にいればやってくるというものではなくて、子供の傍にいる大人が様々な配慮や支えを提供し、子供とできるだけお互いの本当のところでのコミュニケーションしていく中で創りだされる体験なのだろうと思う。子供と一緒にいて満ち足りているときには、きっとそれが意識しないうちにもできているときなのだろう。だからそういう体験の丸ごとを掘り起こし、大人である私にも理解し、認識できる言葉に翻訳してみたい。そうしたら子供といっしょのこ

の毎日の生活のなかから、世界中の文化遺産にも相当して余りある、富と智恵が日々生まれていることが実感できるだろう。ただ、小さな編目をひとつひとつ必死で連ねていつている最中に深い省察をするのは難しい。だから本や何かの文章で、



また幼稚園の先生の言葉などから、それを伝えてもらえたとき、私はしみじみとうれしくなる。そして、ああ、こういうことをひとつひとつしっかり蓄えていけば、外の地鳴りの正体だってわかってくるなと思うのだ。

それからもうひとつ、子供と一緒にいてイライラの種になることが、子供の評価ということだ。この子供が生まれてきたときにはもうそのままで充分だと思い、心からこの子を喜んでいたのに、いつからかどうだこうだと批評し始める。子供が自分で自分のことを評価し始めるのはいつ頃からだろうか。うちの子供達を見ると、三歳頃からまわりにいる大人たちが自分のことをどう言っているかに気がつき始め、自分のなかに取り込んでいくようだ。ただそれは大人にも気が付きやすいところでのことで、そういうことは胎児の頃か

ら既にあるという。安易な評価の結果、また相手を評価しようとする姿勢は、意外に深く心に傷を残すことになるのではないだろうか。

末の子が一月健診の時、体重のふえ方が少ないということ、母子手帳に「栄養不良」というはんこを押され、母乳にこだわりすぎてはいけないと指導された。一歳一〇か月の今充分健康だし、あの時でさえ毎日一緒にいて特別心配はしていなかった。それなのに今でもあの時はんこを押した看護婦さんの言葉や態度に私はこだわっている。思い出すと胸がチクリと傷むのだ。

長男は幼稚園でも間接的な表現ではあったけれど、「このままじゃ、ダメですよ」といわれたような気がする。卒園の時点で、まだひらがながほとんど書けなかったからだ。たしかに幼稚園の先生が心配してくださったように、小学校では子供のペースなどにはおかまいなく、こなしていかね

ばならない課題がつぎつぎと負わされていくことだろうから、「このままじゃ」本当に心配だ。そういう本音を持ちながら、「あなたは今のままでいいのよ」なんて言ってもすぐばれる。長男はきつと私の心配を感じとっている。

子供の今のありのままを認めようということ、私も耳にしてきたけれど、そこから始めないと子供が安心していられないからという、単なるスタートラインの立ち方としてであったり、「うん、そのままでもいいのよ、でもその次にはね、…」と、実は心のどこかに「でも」を隠しもっていたりして、この子が本当にこのままで素晴らしいのだとは思えないことが多い。子供の身長や体重を測るのと同じように、色々な物差しをもっときては子供を測り、評価することをやめられない。でもふと我に返ってみると、おや、私は何をしているのだろうか？ 同じ年ごろの子供達の

なかで、もしもじしていておっとりしていて、何をやっても上手にできないとしても、それだからと言ってこのこどもに×をつけるのは誰だろうか？ この人が今こうしてあることは、いわば現在進行中の歴史のようなものであって、誰一人として同じ道筋をたどることがないとすれば、私は何をもって測ろうとしていたのだろうか？

長男が幼稚園で友達のなかになかなか溶けこめず、いつも一人でまわりを眺めてばかりいることが私にはいたたまれなくて、どうしてこんなふうなのだろうか？ 私の育て方のどこがいけなかったのだろうか？ などとよくよしていたとき、私の愚痴を聞いたある人が、「それは彼にとつての財産だよ、本当に。持とうと思っても持てないものなんだよ。」と喋ってくれた。その一言で私の気持ちはどんなに救われたことだろう。この子供のあり方そのものが、他にはない財産だという。そ

の人は自分も子供の時同じようだったからわかるのだという。この子の今の在り方をそのまま大切にしていっていいのだと、母親たちはどんなに信じたいことだろうか。

評価すること・されることと無縁ではいられない社会のなかで生活していくのだから、それらを無視していいこうとしても仕方がない。でもそのことで無用に傷つかないように、また誰かを傷つけないようにしたいと思う。

母親になると、一人の人の命を身体ごと委ねられる。この命は世界中で今までにあったことがなく、またこれからもあらわれることのないたったひとつの存在で、それがどんなふうに芽をもたげ、どんな具合に枝葉を広げ、どんなに美しい花を咲かせ、かぐわしい実を実らせるのか、誰も知らない。この命に水をやり、陽をあてるよう頼まれている父親と母親にさえわからない。そう考え

ると、命を育てることと評価するということはずいぶん違う仕事だと思う。それなのにこの社会ではそのふたつのことがとても近くにある。まるで密接な関わりがあるかのような錯覚をもってしまふけれど、目指していることは違うことが多いのではないだろうか。

母は強しなどといわれるけれど、本当は我ながらなんて弱いのだろうと思う。子供のことを「いい子だ、いい子だ」と毎日喜んでいられる単純な心さえ持てたら、他には何もいらないとさえ思ってしまう。

(はるにれの会)